

私のはんせい記

～「改修設計」事始め～

建築家 三木 哲

● 住いの履歴・団地に住む

私の住いは横浜の賄いつきの下宿から始まる。横浜国大の経済や学芸、工学部の学生が3～4人と家主の家族、2人の娘が同じ屋根の下で生活し、朝食と夕食は大きな食卓を囲んだ。風呂は順番に入浴した。

卒業後、東中野の4.5帖ひと間の本賃アパートを借りた。便所・洗面所は共用で銭湯に行った。当時、東中野は狭い道路と敷地に木造アパートが密集して建ち、大卒の初任給で支払い可能な家賃であった。帰宅して窓を開けると道路の向かいの住人と目が合うこともあった。

結婚して横浜・東戸塚の県営川上団地に住んだ。公営2種、低所得者向けの公営アパートで、6帖2間に台所流しと風呂・便所付きの「2Kタイプ」であった。日本で最初のプレキャストコンクリート板構造の住棟で、桧製の小判型浴槽にはガス焚の煙突が付いていた。

スラブ厚さが薄く、下階の居住者から苦情が寄せられた。天童木工製の食卓と椅子を購入し、設計したユニット収納や本棚、ペットを木工所で作った。風呂付で、女房と食事できる居住環境は本賃アパートよりはるかに向上した。

当時、横須賀線や東海道線の東戸塚駅はまだなく、田圃や畑、山林に囲まれた中に真新しい住棟が建っていた。休日には近所の戸塚カントリークラブのゴルフコースを散歩することもあった。

横浜駅からバスで30分も要し通勤に不便なので、息子の誕生を契機に引越しを検討した。

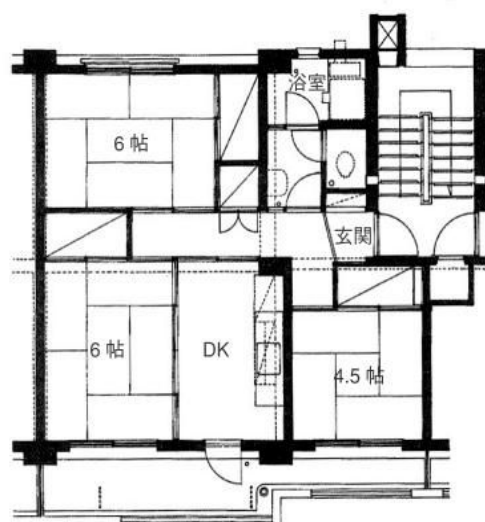
1967年から7年間、東大全共闘時代と建築事務所に勤務している期間、ここで暮らした。

当時、東京近郊では公団や住宅供給公社が大規模な団地を次々に建設していた。

1974(昭和49)年、私が31歳のとき、鶴川6丁目団地を購入した。

なぜ鶴川6丁目団地にしたのか？

明治大学全共闘・建築闘争委員会と、東大建築共闘会議が交流をした際に、明大助手の中村幸安さんから6丁目団地の瑕疵補修運動や多摩生協運動の報告を受け、興



味を持ったからである。

マスコミをにぎわした団地で、貯金をはたき女房の兄貴から借金して中古住宅を購入した。階段室型・5階建て3DK：専有面積52.03㎡の5階にした。バランス釜の浴槽や洋式水洗便器、ステンレス製流し台にガスレンジが付き、ダイニングキッチンと2室が南面していて、日当たりや眺望も良い。

賃貸住宅では模様替えはできないが、分譲なら躯体を傷つければ室内の改装は可能である。ダイニングキッチンと続きの6帖、北側6帖を隔てる木造間仕切り壁と押入れをすべて撤去し、18帖分をワンルームに改装した。ラワン板を購入し本棚などの収納家具ユニットを30個ほど製作し間仕切に使った。このリフォーム工事は休日を利用して女房と2人でこつこつ施工した。

60mm見込のアルミサッシの内法は1.75m、階高は2.55mで天井高さは2.3mと低かったが、風通しもよく伸びやかで快適な空間であった。

入居当時、団地の北側には小川に沿って田圃が広がり、その向こうは神奈川県川崎市との県境の山林がひろがっていた。この山林の傾斜地を100坪ほど女房が購入した。

神奈川と東京の県境の道路が北東側にあり、南西に下る傾斜地で雑木林に囲まれていた。

1989(平成元)年にここに住宅を建てるまでの15年間、鶴川6丁目団地に住み、団地建物の維持管理や修繕、管理組合のことなど、貴重な体験をさせてもらった。

この団地が、私が既存建物の修繕・改修の道に進む原点となった。

みき・てつ

(南)共同設計・五月社一級建築士事務所共宰者。1943年生まれ。建築家がメンテナンスを手がけることなど考えられなかった時代から「改修」に携わり、30年以上にわたって同分野を開拓し続けてきたパイオニア。